Truth［トゥルース］

富山のスポーツの
真実を伝える

2018 冬号

Tスポとやま

¥0 Takefree

富山初のスポーツマガジン

VOL.12

2020年東京五輪へ 意気込み

スポーツくじ toto BIG
スポーツ振興くじ助成事業

Truth［トゥルース］

VOL.12 富山のスポーツの真実を伝える 冬号

ホームページもご覧ください！！

Yudai Baba

baseball

Hiyori Nakatani

TOYAMASPORTS THREE TEAM

TOYAMA SPORTS MESSAGE BOARD

Hikaru Ooe

SPECIAL FEATURES

02 バスケットボール男子日本代表
アルバルク東京・馬場
2020年東京五輪へ意気込み
特別寄稿・花田真寿美

04 富山少年野球リーグ
小学生の野球人気を取り戻せ

06 チアリーディング日本代表・中谷日和
「苦しくても、弱音は吐けない」
世界選手権9連覇までの歩み

富山のプロチーム3球団のリアル情報

08 野球
富山GRNサンダーバーズ
新たに伊藤監督就任／新入団選手発表

10 サッカー
カターレ富山
新戦力迎え心機一転

12 バスケットボール
富山グラウジーズ
Bリーグ・大河チェアマンに聞く

14 富山のスポーツ伝言板
レスリングの栄監督、吉田選手が講演
2017年富山のスポーツ10大ニュース

16 平昌五輪に挑む大江光 母娘の物語
特別寄稿・泉敏郎

※皆様からの耳寄り情報お待ちしています！

県内のファミリーマートで「Truth」を配布いただいています！

「Truth」の配布にご協力いただいている店舗・事業所などは次の通りです

あおき接骨院、KHEIR（ケイル）、スポーツドームエアーズ、ボンジュールSAKATA二口店、ボンジュールSAKATA富山駅前店、いっぽ堂、スポーツショップランナー、ノン・ビリィ、山内武道具店、カフェ ジャックラビット スリムス、アピアスポーツクラブ、西能病院、JSS富山インドアテニススクール、うな富、ビッグエッグ、ベースボールハウスMVP、すき焼 はやし、バイエルンスポーツ、（有）栄寿し、居酒屋酔虎伝、松長接骨院、竹接骨院、奥田接骨院、原接骨院、ヘアーサロンみずほ、いなみ木彫りの里 創遊館（道の駅 井波）、ねむり家、MUSCLE GYM TOKYO富山店、娘娘餃子、ステーキ すず屋、高岡ワイン倶楽部、LIXILリフォームショップ ユニテ、Mag Haus、カフェ ゴッコ、ハウディーキオスクマーケット1931、ゴールドカレー富山豊田店、curry&bar nine、遊さん、万里摩理（マリーマリー）、Trattria La Luce、浅川接骨院、寿司正、桝カフィ、おき接骨院、村上接骨院、ヤマヒデホーム、らんぶる、スポーツ&コンディショニングセンターPOSS.、山田書店、富山空港内の喫茶Wingとカードラウンジらいちょう、らーめん菜館はじめ

（順不同）

このほか、富山県内のスポーツ・文化施設、公共の窓口、スポーツ団体の事務局、総合型地域スポーツクラブの事務局などで配布いただいています。NPO法人Tスポとやまは、「Truth」の配布にご協力いただける事業所・店舗などを随時、募集しております。

富山発のスポーツメディア Truth

NPO法人　Tスポとやま　富山初のスポーツマガジン「Truth」発行・運営
TEL：080-3461-5959　E-mail：nisennen@tspotoyama.com
ホームページ：http://tspotoyama.com/　Facebook：https://www.facebook.com/tspo.truth

バスケットボール男子日本代表・馬場雄大インタビュー

全ては将来のための選択。

YUDAI BABA

聞き手、文　花田真寿美（特別寄稿）、金森正晃
写真　ALVARK TOKYO、金森正晃

私が馬場雄大選手を初めて見たのは、彼が富山一高3年生の時に出場した北部九州総体だった。5年ぶりに再会した彼の身体はひと回り以上大きく鍛え上げられ、「日本代表」として世界を舞台に戦う、堂々としたオーラを身にまとっていた。今、目の前にはどのような風景が広がり、どんな未来を手に入れようとしているのだろうか。

■怒涛の1年、将来を見据えて

――変化の大きい2017年だったと思います。

「振り返れば濃く、充実していました。環境にも恵まれています。選択は間違っていなかったと思いたいし、選んだ道を『正解』とするため、全力で頑張ります。2月に行われた日本代表デビューのイラン戦が前の年の出来事と感じるほどの濃密さでした」

――筑波大でインカレ3連覇を実現する中、インカレの前に引退し、アルバルク東京へ入団されました。日本代表コーチから英才教育を受ける個人ワークアウトの選択など大きな決断が続いたと拝察します。

「NBAで活躍するという夢があり、その実現のために今の年齢では、何が一番必要かということが進路の判断基準となっています。今は、通過点に過ぎません」

■後悔をしたくないから

――最初、日本代表の試合に出られなかった時がありました。何が変わったから、出場できるようになったと思いますか?

「アグレッシブさですね。海外の選手と戦うにあたって、気持ちの部分で負けてはいけない。それが一番大切だと思っています。ほかのメンバーが気負って、攻められない中、ドライブで突っ込むなど、打開策を見つけることができました」

――悔しい経験があったのですね。最初の代表合宿でも思うようなプレーができなかったと……。

「2度目の代表合宿までは、ほかの選手よりも招集されるのが遅かったのです。『選ばれないかもしれない』と思ったら、声が掛かった。『もう、こんな思いはしたくない。悔いのないようにプレーをしよう』と思うようになりました」

■富山で培ったリーダーシップ

――富山で培われたものは今、どんなふうに生かされていますか?

「リーダーシップです。責任転換をしていたらチームとして成り立たないので、大切にしたいと思います。また、プロになり、身だしなみにも気を遣うようになりました。見られる仕事だと意識しています。ブースターの皆さんがいるから自分たち選手がいる。応援してくださっている方が、あこがれてほしいと思います」

■可能性に制限をかけない

――富山のバスケットボールをする選手へアドバイスをお願いします。

「今、身長が高い・低いからということでプレーを制限してほしくないです。日本人は、海外の選手に比べて身体が小さく、技術も足りないところもあるでしょう。でも、センターであっても、ドリブル練習を積極的にしてほしい。それが未来につながると思います。自分に制限をかけずチャレンジし、可能性を高めてください」

――2020年東京五輪に向けての意気込みは?

「東京五輪があるから今、日本でプレーしています。ここで結果を残すことで日本のバスケットボールの未来が明るくなるはず。今後は、東京五輪に出場に向けて結果を残すことが自分に一番求められていることだと思っています。夢を忘れず、毎日を「一生懸命過ごす先に結果がついてくると思います」

――意志の強さ、自分の未来にワクワクしている瞳の輝きが頼もしいです。「可能性は無限だ」と体現してくれています。彼の夢がかなう日が待ち遠しいですね。ありがとうございました（花田）。

ばば・ゆうだい　1995年11月7日生まれ、富山市出身。バスケットボールの男子日本代表。ポジションはスモールフォワード。富山市奥田中、富山一高出身、筑波大在中。アルバルク東京所属。2015年ユニバーシアード、17年東アジア選手権出場。195センチ、90キロ。

はなだ・ますみ　1987年5月27日生まれ、富山市出身。アスリートビューティーアドバイザー。富山市山室中、高岡西高、中京女子大（現至学館大）卒。元バドミントンアスリート。ミスユニバース愛知ファイナリスト。

今いるところ 目指すべきところ

写真撮影を担当したカメラマンの金森正晃は、馬場選手の印象を次のようにまとめた。

◇　◇

馬場の身体能力ばかりがクローズアップされがちだが、現在の彼があるのは高校まで生活した富山での地道な練習があったからこそだ。奥田中、富山一高、全てのポジションを経験してきた。ボールを出すところからシュートのフィニッシュまで一連のイメージを自分の中に持つことができる。複数のポジションから見渡せる広い視野こそ、彼の身体能力を爆発させる鍵になっている。味方相手の気持ちが分かるから、今、必要なプレーを選択することができる。

2017年12月10日、アリーナ立川立飛で行われたアルバルク東京―大阪エヴェッサ戦を、高校時代のコーチでもある父・敏春さんが観戦した。試合後、激励の言葉は「上手くなっているけど、お前の目指すべきところはどこなんだ」

故郷を離れ、東京を舞台にバスケットボールと向き合っている今、彼には高校時代に何度も言われた父のセリフがその頃とは違って聞こえていた。

ひょっとしたら「目指すべきところ」はBリーグや五輪ではないのかもしれない。父からの言葉を胸に馬場の五輪への道は始まっている。

四方こども園でのキャラバン活動の様子

野球人気を取り戻せ！

富山少年野球リーグが普及活動

子どもたちの野球離れが進んでいる。富山県内でも少年野球チームの多くが選手不足に悩んでいる。危機感を抱いた旧富山市内の各校区のチームでつくる「富山少年野球リーグ」が、ある取り組みに乗り出した。

文　中沖　紘一
写真　富山少年野球リーグ

筆者自身、少年野球の指導をしており、子どもたちの野球離れを肌で感じる。「走ってばかりで練習が厳しそう」「将来、坊主頭にしなくちゃいけない」「親の送迎が大変だと聞く」「道具にお金がかかる」「ルールが難しい」といった声をよく耳にするようになった。少年野球チームの選手不足は少子化による児童数の減少ばかりが原因ではない。スポーツを始めるにあたり、子どもたちや保護者から野球が選ばれなくなっているようだ。

野球が国民的スポーツであり、親子でプロ野球中継にかじりついていたひと昔前とは時代が違う。全国各地にプロクラブがあるサッカーやバスケットボールをはじめ、子どもたちの周りにはたくさんのスポーツがあふれている。ほかの競技と比べて、野球はボールだけでなくバットやグラブが必要で、ルールも複雑に映っているのかもしれない。

■巨人の活動を視察

富山少年野球リーグの登録選手数はここ10年で急激に減少した。2007年までは1000人を超えていたが、14年には700人を切った。ピーク時に34あったチーム数も選手不足による活動休止や統合により現在は30を切っている。

同リーグの事務局長を務める高見喜義さんは「危機感を持って野球の普及に取り組まなければならない。まずは小学校への入学を控えた幼児にボール遊びの楽しさを知ってもらうことが大事だ」と考えた。手がかりをつかもうと昨年2月、プロ野球・巨人の野球普及活動「ジャイアンツアカデミー」を視察した。

同アカデミーでは巨人のスタッフが幼稚園や保育所を訪問し、ティーボールを通じてボール遊びの楽しさを伝えている。ティーボールでは、ホームベースにボールを置くスタンドを立て、止まったボールを打つ。打つ、捕る、投げるといった野球の基本動作が体験できるゲームだ。富山少年野球リーグでもいち早く1998年から小学1・2年生向けに独自のルールをつくりティーボールのリーグ戦を行っている。

幼児向けの同アカデミーでは、より大きなボール、より軽くて太いバットを使って空振りしないように工夫していた。一緒に視察した同リーグ副事務局長の芹田稔さんは「バットという道具を使ってボールを飛ばす快感に子どもたちは夢中になっていた。簡単なゲーム形式で、みんなが勝てるように工夫して成功体験を与えて

リーグの加盟チームには幼児用の道具の貸し出しも行う

いた」と振り返る。スタッフが保育士のように子どもたちと接して心をつかんでいる様子も印象的だった。

■キャラバン隊を派遣

高見さんと芹田さんは各チームの監督と父母会長に視察の報告を行い、「富山市を中心に幼稚園や保育所を回ってティーボールを教えるキャラバン隊を結成しよう」と提案して賛同を得た。しかし、普段の小学生相手の指導とは勝手が違うため、接し方をはじめ園児を楽しませる工夫が課題として挙がった。そこでヒントとなったのが、同じリーグの岩瀬ドラゴンズの活動だった。

岩瀬小学校区の岩瀬ドラゴンズは3年前、選手不足で他チームとの合併を余儀なくされた。そこで当時の父母の八町昌洋さんが中心となり、チームの再建を目指して地元の岩瀬保育所でティーボールの体験会を何度も行った。八町さんが「ウィッキーさん」と名付けたサルの着ぐるみを身に付け、園児を喜ばせながら、試合ができるぐらいにまでティーボールを教えた。体験会では手作りのメダルもプレゼントしたという。その成果は顕著に現れ、選手は昨年32人まで増えてチームは復活した。八町さんは「一度ではなく、繰り返し保育所に足を運んで、子どもたちに野球の楽しさを浸透させられたのが良かったのかもしれない」と話した。

八町さんの協力も得て各チームの有志が動き出し、昨年の夏に初めてのキャラバン隊を四方こども園に派遣した。炎天下にもかかわらず着ぐるみに入って子どもたちを喜ばせ、手渡したメダルの裏には地元の少年チームの練習日などが書き込んだ。しばらく経って小学校で行った体験会には5人の園児が姿を見せ、ある親は野球に気持ちが傾く我が子を見て「何してくれたんだ。うちはサッカーをやらせたいのに」と頭を抱えていたと地元チームの監督は笑う。キャラバン隊の活動は順調な滑り出しをみせている。

県西部でも昨年、同じく野球の普及を目指して「とやまティーボール推進委員会」が発足。小学校の体育に採用してもらうための取り組みや出前講座などを行っている。今年は富山少年野球リーグと協力し、県内全域の小学4年生以下を対象にしたティーボール大会を開催する。ティーボールで唯一行われている全国大会の予選も兼ねたビッグイベントになりそうだ。

■野球の楽しさ伝えたい

富山県内の野球関係者でつくる「県野球協議会」は高校野球における県勢の甲子園ベスト8を目標のひとつに掲げている。その集まりでも「このままでは県内の野球人口が減り続けて高校野球の強化どころではなくなる」と危惧する声を聞いた。

筆者は高校球児の坊主頭が嫌いではないし、野球における厳しさを前面に押し出した練習法をすべて否定するわけでもない。しかし、現状を見つめて必要ならば転換を図らなければならない。まずは「野球は楽しい」ということを伝えて、分かってもらわなければ始まらない。そのために立ち上がった〝野球オヤジ〟たちの奮闘を応援したい。そして子どもの「やりたい」に、親が応えてあげやすい環境作りも同時に進めていかなければいけない。

◇　◇

キャラバン隊派遣の問い合わせ先は、富山少年野球リーグ事務局。090（1316）7016（高見）

ジャイアンツアカデミーの様子

「富山少年野球リーグ」と「とやまティーボール推進委員会」の連絡会議

富山少年野球リーグのチーム数と選手数の推移

年（西暦）	チーム数	選手数
1982年	16	576
2001年	34	1066
2002年	33	1044
2003年	34	1023
2004年	33	946
2005年	32	955
2006年	32	973
2007年	32	1006
2008年	31	915
2009年	31	930
2010年	31	893
2011年	31	853
2012年	31	735
2013年	30	720
2014年	29	668
2015年	28	704
2016年	29	693

苦しくても、弱音は吐けない いつも、笑顔で。

チア日本代表・中谷日和

第9回チアリーディング世界選手権の女子部門で日本が9連覇を達成した。その主力として活躍したのが、富山商高 OG の中谷日和選手（梅花女子大）。10 月下旬に黒部市内で日本代表合宿が行われた際には、後輩や県内のチアリーディング関係者からエールを送られ、チアにかける熱い思いを語った。どんな思いで、これまで競技に打ち込んできたのか？

なかたに・ひより　1996年1月25日生まれ、富山市出身。婦中町神保小、城山中、富山商高卒、現在は梅花女子大。4月から大阪市内の企業に勤務する予定。

文・写真　若林　朋子

チアリーディングとは？「甲子園球場のアルプススタンドなどで応援する女子生徒」と思っている人も、いるかもしれない。中谷選手が卒業した富山商高も高校野球の強豪校だが、「在学中は一度も甲子園には行けなかった」（中谷選手）と悔しがる。

「チアリーディング」と「チアガール」を混同してはいけない。前者は、それだけで団体競技として成立している。起源は米国。アメリカン・フットボールなどの試合で、ハーフタイムに選手を応援するために披露されるパフォーマンス。アクロバティックな演技に特化し、チーム一丸で妙技を競うアート・スポーツである。シンクロナイズドスイミングや、新体操に近いかもしれない。

チアの大会の最高峰となるのが、世界選手権だ。出場者はアスリートとして鍛錬を積んで大会に臨み、難易度の高い技が披露される。根底には「応援」という要素があるため、笑顔で演技することが求められる。苦しいけれど、弱音は吐けない。チアリーディングは、過酷なスポーツである。

中谷選手は何がきっかけで、チアを始めたのだろうか？「富山パレスで小さいころから新体操を習っていました。中学生の時、近所に住む竹林静香先輩が出場していた大会を観戦し、『トウ（つま先）タッチなどは自分もできる』と思いました。柔軟性には自信があります。そこで、『高校でチアリーディングをやってみたい』と思いました」

もともとアスリートであり、新体操によって身体能力は鍛えられていた。富山商高入学後にチアを始め、すぐに高度な技もできるようになった。ただし、課題も。チアは団体競技である。コミュニケーションの難しさを感じ、仲間と一丸で戦っていくことに悩んだこともあった。しかし、チームワークがチア魅力でもある。「華やかに見えるけれど厳しい世界」に喜びを感じた。チアを始め、「性格が明るくなった」と周囲の人から言われたそう。あいさつをすることの大切さを知り、実践もした。

富山商高卒業後は、関西の名門校である梅花女子大へ。「高校ではエースだが、全国から有力選手が集まるとまた下積みから……」というのは、どのスポーツでもあること。中谷選手は地道に鍛錬を積んだ。

「（梅花女子大は）全国から強い選手が集まってきているので、最初は『（一軍の）Aチームで演技ができるようになるだろうか？』と不安でした。高校時代は一番上に上がる『トップ』のポジションでしたが、大学では二段目で演技する『ミドル』を専門とするようになりました」

観客はトップの選手に目がいくけれど、競技をする側からすれば「どの選手も主役」だ。そこでは「頭の切り替え」が大切。中谷選手も、他者をいかすことで、自分の生きる道を切り拓いていく。「うまい人と組むからできる技がある」ということを学び、4年生の時には5年ぶりの日本一を勝ち取ることができた。

スポーツはそれぞれに魅力がある。チアなどのアート・スポーツは、ライバルとの勝負だけでなく、自分との戦いに勝ち、納得のいく演技ができるかも重要な要素だ。

「ほかのスポーツを見て参考にすることがあります。よく見るのは体操。あと、フィギュアスケートにも興味があります。『羽生結弦選手は大歓声の中、1人で演技ができるなんてすごいなあ』と思ったりもしています」

観客を楽しませたうえで、得点を競うのがチア。そのためには、自分も楽しまなければ満足のいく演技はできない。

10月下旬に黒部市内で日本代表の合宿が行われた際には、多くの小・中・高校生と保護者が見学した。コーチから「みんなに支えられているんだよ」と言われ、思わず涙ぐむ場面も。合宿の成果もあって、世界選手権では全力を出し尽くし、一丸で頂点に立った。

「富山の皆さんの応援が励みになりました。日本代表としての任を果たすことができました」

日本代表のヘッドコーチが富山市在住という縁もあり、最後の調整合宿を故郷で過ごすことができたのは、中谷選手にとって幸運だった。故郷への思い入れは強いが、今春、大学を卒業した後は大阪の会社に勤める予定である。Uターン就職も考えたが「私を選んでくださった会社に決めました」と笑顔を見せる。

「社会人になると厳しいこともあるでしょうが、『帰るところがある』と思えば頑張ることができます。挑戦です」

元チア日本代表として、苦しくても、弱音は吐けない。いつも、笑顔で。

元気、明るい、素直

「中谷選手って、どんな人？」。日本代表ヘッドコーチの小竹美夏さんと幼なじみで、高校、大学、日本代表の先輩である竹林静香さんに聞いてみた。

■小竹さん「コツコツ」「スタンスを変えずに努力する」「素直」という富山県人の気質を持った選手ですね。

■竹林さん　持ち味は元気で明るいこと。チアの選手としてピッタリの性格です。日本代表メンバーのまとめ役として頑張ってくれています。私が日本代表だった時と比べ、チームは格段にレベルアップしました。

監督初挑戦「伝説の投手」が富山へ

富山GRNサンダーバーズ　伊藤智仁監督

吉岡雄二前監督の日本ハム2軍打撃コーチ就任の発表から約1カ月たった2017年 12月1日、富山GRNサンダーバーズから「新監督合意」のメールが流れてきた。そこにあった名前は「伊藤智仁」。記憶に残るヤクルトの名投手が、2018シーズンから指揮を執る。

TOMOHITO ITO

いとう・ともひと　1970年10月30日生まれ、47歳。京都府出身。花園高（京都）から三菱自動車京都入り。1992年バルセロナ五輪の日本代表に選出され、1大会27奪三振の活躍で銅メダル獲得に貢献。同年のドラフト1位でヤクルト入団。93年に7勝を挙げ、新人王に輝くも、以後は故障に悩まされる。97年に7勝2敗19Sでカムバック賞受賞。2003年まで現役生活を続け、通算成績は37勝27敗25S。04年から17年までヤクルトで投手コーチを務め、18年から富山GRNサンダーバーズ監督、背番号84。

聞き手・文　土田　由香里
写真　赤壁　逸朗

●ヤクルトでの活躍

1993年から2017年まで、東京ヤクルトスワローズ一筋25年。現役・投手コーチとして在籍した。入団1年目の活躍は、往年の野球ファンなら誰もが知るところである。この年始には特番「消えた天才 超一流が勝てなかった人大追跡」（TBS系）で取り上げられ、昨年発刊された『マウンドに散った天才投手』（松永多佳倫著、講談社）でもクローズアップされるなど、注目度が増している。

当時、バッテリーを組んだ野球解説者の古田敦也氏はテレビ番組で「伝説の高速スライダー」について「自分が打者なら打てない」と言った。

肩の故障により戦列を離れ、長いリハビリ生活を強いられた。一時は抑えを担うなど、復活を果たしたものの、惜しまれながら2003年に引退。04年から投手コーチとして、ヤクルトの投手陣を指導してきた。昨シーズンでヤクルトでの生活を終え、初めて監督を務める。

●BCリーグへの興味

ヤクルトを退団し、フリーになった伊藤氏は「家族との時間を過ごしたい」と、少し休むつもりでいたそうだ。しかし、「放っておくにはもったいない」という永森茂球団社長のオファーを快諾。「BCリーグに興味があった」という伊藤氏は、複数のチームから誘いがあった中で富山を選んだ。ファンとしては嬉しい限りだ。「若い選手のチャンスの場で、自分の経験を伝えられれば、さらにリーグが盛り上がる」。その思いが、「監督業の第一歩」を踏み出す要因だった。

●選手とともに成長を

独立リーグの環境は、スタート時からみると整ってきている印象はあるが、NPBと比べてしまうとまだまだ厳しいものがある。だからこそ、選手はハングリーさが養われ、懸命に取り組む姿勢がファンの心をつかむと考えられる。

伊藤新監督は、投手陣の指導だけでなく全体を把握、指揮していかなければならない。1月8日にイオンモール高岡で行われた新入団選手発表の席で永森球団社長は「ぜひ投手王国といえるようなチームに育ててほしい」と期待を込めた。

伊藤新監督は新入団選手を見た印象について「体の大きい選手が多い」と感じたという。投手については「球の速い、体力のある選手を育てたい」と意気込みを語り、「やりがいがある」と楽しみにしている表情を浮かべた。

●ファンの心を掴む空気感

新入団選手発表には例年以上のファンが集まった。伊藤新監督への期待、またその姿を見ようというファンが多かったのだろう。ファンからの「ニックネームは」という質問にも「ともちゃんと呼んで」と笑いを誘った。緊張感があった空気が和らぎ、その場を明るく楽しい場に変えてしまう。そんなところにもファンは虜になったのではないだろうか。

「選手、富山のみなさんとともに成長していきたい」そう語った伊藤新監督。球場ではどんな表情で、どんな言葉で、選手を導き、ファンを喜ばせてくれるのだろうか。今から開幕が楽しみだ。

新入団選手ひと言

■投手

菅谷潤哉（すがや・じゅんや）背番号11、福井県出身、武蔵ヒートベアーズから移籍。気持ちを全面に出して投球する。チームの勝利に貢献できるように頑張る。

阿部力也（あべ・りきや）背番号13、和歌山県出身、城西大卒。アンダースローからの投球に注目してほしい。チームの戦力になれるように1年目から必死に取り組む。

湯浅京己（ゆあさ・あつき）背番号17、三重県出身、聖光学院高（福島）卒。気迫を全面に出すピッチングスタイル。開幕からチームに貢献できるように取り組む。

佐藤宏樹（さとう・ひろき）背番号19、千葉県出身、愛媛マンダリンパイレーツ。監督を前におこがましいが、スライダーが得意。新しい環境で頑張る。

2018シーズンへ意気込み

古村徹（こむら・とおる）背番号24、神奈川県出身、愛媛マンダリンパイレーツ。独立リーグ日本一、個人としてはNPB入りに向け、日々精進する。

乾真大（いぬい・まさひろ）背番号60、兵庫県出身、読売巨人軍。力強い投球とボールのキレをアピールする。開幕から良い投球が見せられるようにしたい。

■内野手

小川竜次（おがわ・りゅうじ）背番号1、北海道出身、北海道ベースボールアカデミー。体が小さいが、元気いっぱいにプレーし、守備で魅せたい。

■外野手

海老原一佳（えびはら・かずよし）背番号32、東京都出身、創価大。富山でプレーできることに感謝している。パワーと力強いプレーでチームに貢献する。

MODEL HOUSE
NEW OPEN!!
職人とつくる木の家
見学をご希望の方はご連絡ください

新戦力迎え心機一転

J3のカターレ富山が新シーズンに向けて始動した。
昨年は終盤に失速して昇格のチャンスを逃した。
就任2年目の浮氣監督のもと雪辱を期す。

写真・文　赤壁　逸朗

©2008KATALLER

カターレは1月15日にチームが始動した。約8週間後に迎える3月11日の開幕戦に向けて準備を進めている。

昨季終了後、クラブは浮氣哲郎監督の続投を決定。J3降格後は監督が毎年交代しており、今回は同じ指導者のもとでの継続的な強化を選んだ。森野弘樹社長は「昨季の前半戦は2位をキープしてJ3での3年で最も良い成績だった。一方、（失速した）後半戦の悔しさもかみしめている。課題を認識でき、弱みを強みに変えられるのではないかと考えた」と説明した。

その一方で選手の顔ぶれは大きく変わった。昨季最終節の時点で在籍した29人のうち17人が引退や契約満了、移籍でチームを去った。代わって新たに加入したのは14人（1月15日現在）で、昨季から在籍する12人を上回る。

浮氣監督は「チームとしてもある程度はつくり直さなければならない。昨季から在籍する選手にはベースがあるので、新加入選手にも伝えてもらいながら、また新たなチームをつくりたい」と話した。新加入選手の特徴を把握し、戦術を浸透させることが当面の課題になるだろう。

■若さと潜在能力に期待

新加入の14人は昨季J3の他クラブで主力だった者と、出場機会を求めてJ2クラブから移籍した者に大別される。

藤枝で12得点を挙げたFW遠藤敬佑、若手の注目株だったMF新井瑞希（前相模原）やMF差波優人（前盛岡）らが前者。後者はFW瀧谷亮やMF川上エドジョン智慧（前徳島）らがそうだ。唯一、水戸から期限付き移籍のDF今瀬淳也が昨季J2で26試合に出場している。彼らのほとんどが20代前半。チームの平均年齢が大きく若返り、30代はFW苔口卓也だけとなった。

新加入選手はいずれも潜在能力が高く、カターレでの開花が期待される。半面、若さや試合経験の少なさを考えると未知数の部分も大きい。黒部光昭強化部長は「J3で優勝するには若い彼らがもう1段階、成長する必要がある」と考えている。

■苦い経験生かせるか

昨季は前半戦を9勝5分2敗（20得点・9失点）の2位で折り返したが、夏の中断明け以降に失速して16年の6位、15年の5位を下回る8位に終わった。

前半戦の頑張りと好調さに目を向けると、昇格のチャンスを逃した「もったいないシーズンだった」という捉え方はできる。残り6試合の時点でも昇格の可能性は十分にあった。しかし、そこから4連敗し、1勝も挙げられずにシーズンを終えた。踏ん張りが利かないほどチーム状態が落ちていたのかもしれないし、そもそも底力やその蓄積がなかったのかもしれない。主将だったMF窪田良は「前年の終盤は相手に研究され対策をとられて難しくなった。今回は自分たちから崩れてしまった感じがする」と振り返っている。

後半戦に限った成績は4勝3分9敗（17得点・24失点）で17チーム中14番目。個々の成長と組織の成熟を目指してきたにもかかわらずシーズンが進むほど成績が悪くなったことは重く受け止めなければならない。上位7チームとの対戦成績も2勝4分8敗と大きく負け越した。シーズンが改まり、新戦力を加えて昇格を狙うが、昨季の反省を踏まえて乗り越えなければならないハードルは少なくないだろう。

浮氣監督は「昨季の悔しさをけっして忘れることなく、集まってくれた選手たちと全員攻撃・全員守備をベースに、攻撃的でアグレッシブなサッカーをやっていきたい。（昨季のように）必ず良い時と困難な時があると思うが、全員が同じ方向を向き、J3優勝・J2昇格という目標に向かって走り抜く。クラブの歴史に残るような熱いシーズンにしたい」と話した。

カターレ富山2017　J3全成績　8位　13勝8分11敗　得点37・失点33

節	試合日	勝敗（得点者）	対戦相手	寸評	順位
1	3月12日	○2-0 代、衛藤	F東23(A)	前半にFKで先制。後半に追加点	2位
2	3月18日	○1-0 佐々木陽	鹿児島(H)	序盤に千金弾。初の開幕連勝	3位
3	3月26日	○3-0 佐々木ー、OG、衛藤	盛岡(A)	速攻光る。J3降格後初の奪首	1位
4	4月2日	●0-3	沼津(H)	今季初失点、ミドルで追加点許す	3位
5	4月16日	△0-0	琉球(H)	優勢も相手GKの好守に阻まれる	4位
6	4月29日	△1-1 苔口	藤枝(A)	初先発の苔口がロングS決める	5位
7	5月7日	○2-0 苔口、佐々木陽	福島(H)	上位対決。対福島4試合ぶり勝利	2位
8	5月13日	△1-1 OG	C大23(A)	後半39分に追い付かれる	3位
9	5月20日	○1-0 衛藤	Y横浜(H)	後半6分、山形のクロスから先制	3位
10	5月28日	●0-1	長野(A)	FKから失点。押し込むも無得点	4位
11	6月3日	○2-0 苔口、平出	相模原(H)	後半20分、苔口が力示し均衡破る	2位
12	6月11日	△1-1 佐々木ー	秋田(A)	終了直前にカウンター浴び失点	3位
13	6月18日	○1-0 苔口	鳥取(A)	ドリブルで約50m持ち込み先制点	2位
14	6月25日	○2-0 苔口、椎名	G大23(H)	PKで先制。椎名が自身J初ゴール	2位
15	7月1日	○2-1 佐々木ー、柳下	北九州(H)	終了間際に決勝点。ホーム5連勝	2位
16	7月8日	△1-1 脇本	栃木(A)	10人で守り終了直前に同点弾	2位
18	7月22日	○2-0 脇本、椎名	G大23(A)	またもセットプレーから先制し快勝	2位
19	8月19日	●1-2 柳下	F東23(H)	終了直前の連続失点で逆転負け	3位
20	8月26日	●1-2 苔口	鹿児島(A)	後半の立ち上がりに連続失点	4位
21	9月2日	△1-1 苔口	Y横浜(A)	後半に追い付かれ辛くも引き分け	4位
22	9月9日	△0-0	C大23(H)	連続試合得点のクラブ記録止まる	4位
23	9月17日	●0-2	沼津(A)	開始直後に失点。好機乏しく完敗	5位
24	9月23日	○2-0 佐々木陽、佐々木ー	北九州(A)	FKから先制。相手の猛攻しのぐ	4位
25	10月1日	●1-2 佐々木陽	栃木(H)	先制も直後に失点し逆転負け	4位
26	10月8日	○1-0 平出	福島(A)	CKからの1点を粘り強く守り抜く	4位
27	10月15日	○4-2 佐々木陽2、苔口2	藤枝(H)	後半4得点。今季初の逆転勝ち	4位
28	10月22日	●0-2	盛岡(H)	台風の風雨強まる中、後半2失点	4位
29	10月29日	●2-3 木本、佐々木ー	相模原(A)	ー時は逆転も急造3バック崩壊	4位
30	11月5日	●0-4	秋田(H)	前半に連続失点。昇格絶望的に	6位
32	11月19日	●1-2 佐藤	長野(H)	退場で10人の相手に逆転負け	7位
33	11月26日	△1-1 登崎	鳥取(H)	登崎のJ初得点で追い付く	7位
34	12月3日	●0-1	琉球(A)	開始4分に失点。決定機つくれず	8位

カターレ案内板

■ホーム開幕戦は3月17日（土）

J3の開幕カードが発表され、昨季8位のカターレ富山は3月11日（日）に沖縄市で同6位の琉球と対戦する。ホームでの初戦は3月17日（土）に県総合運動公園陸上競技場であり、同7位の藤枝とぶつかる。

〈問い合わせ〉カターレ富山 電話076-461-5200

■設立10周年事業を展開

カターレ富山は設立10周年を迎えたことから2018年シーズンにさまざまな記念事業を展開する。トップチームはJリーグ参入を目指して2008年に発足し、翌年からJリーグで戦ってきた。今季がJFL時代を含め11シーズン目になる。

富山に「アリーナ文化」を

Bリーグ大河チェアマンに聞く

MASAAKI OKAWA

おおかわ・まさあき　1958年5月31日生まれ。京都市立洛星中、洛星高（京都）時代はバスケットボール部所属。2010年に都銀を退社してJリーグ入り。クラブライセンス制度導入やJ3リーグ創設に尽力。バスケットボール界の改革を推進した川淵三郎（初代Jリーグチェアマン）の要請を受け、15年9月からBリーグチェアマン。

聞き手・文　松井　克仁
写真　赤壁　逸朗

富山グラウジーズはBリーグ2年目を迎えて、実力、人気ともに着実な成長をみせている。視察のため富山を訪れたBリーグの大河正明チェアマンにグラウジーズへの期待やリーグの現状について聞いた。

――Bリーグは2年目を迎えた。手ごたえはあるか。

新リーグ誕生に沸いた1年目に比べると鮮度はどうしても落ちるが、観客数は12月末の時点で、B1・2平均5～6％増と数字的には悪くはない。人気はじわじわきていると感じる。グラウジーズも今季のホームゲーム15試合を終えた時点での1試合平均観客数が2385人で昨季より約300人増えており、着実に成長している。B1の18クラブを選ぶ際にグラウジーズは18番目で入ったが、1年目の順位は15位だった。

2020年をめどに上位に食い込み、事業規模についても中位ぐらいになってほしい。そのためにも徹底して「富山にグラウジーズあり」と、市民や企業のみなさんに覚えてもらう努力をすることが大切だ。

■宇都は象徴的な存在

――リーグの誕生によって競技レベルも上がっている。日本代表の強化につなげなければならない。

試合に出場する機会が増え、選手の実力が底上げされている。アルバルク東京から昨季富山に移籍した宇都直輝選手が日本代表に初選出されるまでに成長したのは象徴的だ。宇都選手は身長のあるポイントガードでスピードもあり、日本代表のフリオ・ラマスヘッドコーチも楽しみな選手だと言っている。2020年の東京五輪に日本代表が出られる力をつけるために、選手が常に切磋琢磨しているリーグにしたい。

昨年12月、2023年に男子のワールドカップ（W杯）を日本、フィリピン、インドネシアで共同開催することが決まった。日本では沖縄市で予選ラウンドを行う。そこを目指してBリーグと日本代表がともに発展していきたい。

――B1各クラブの実力は昨季以上に拮抗している。昨季は残留争いをしたグラウジーズにも上位進出のチャンスありそうだ。

前半戦をみると、昨季王者の栃木が東地区で下位に甘んじるなど、各チームのレベルが上がって実力が拮抗している。旧b.jのチームが旧NBL勢の激しいディフェンスや当たりに慣れてきたように感じる。

グラウジーズにもプレーオフ（チャンピオンシップ）に進出するチャンスが十分ある。上位8チームがチャンピオンシップ、下位4チームが残留プレーオフに進む仕組みは、シーズン終盤まで多くのチームが戦う目的をもてる仕組みであり、しばらくは続けていきたい。

■ライフスタイルの創出を

――新たに発足したBリーグが日本のスポーツ界に与える影響は大きい。

Bリーグが目指すのは、アリーナ文化の醸成だ。プロ野球が年間2500万人を動員するのに比べ、Bリーグは200万人でまだその10分の1にすぎない。プロ野球がない冬にアリーナで行うスポーツを見る文化をつくりたいと思っている。グラウジーズは水曜日の夜にホームゲームを開催し、3000人近い観客を集めた。平日の仕事帰りに、ビールを飲みながらバスケットボールを楽しみリフレッシュし、次の日からまた仕事に励む。そんなライフスタイルを創出するイメージを描いている。

平日のゲーム開催は今後も増やしていきたい。そのためには観客が臨場感たっぷりにプレーを楽しめる施設の整備も大切だ。〝体育館〟ではない、本当の〝アリーナ〟が国内に10～20カ所は必要だ。「アリーナ文化」が醸成されることで、スポーツに携わる人たちの地位がさらに向上すると考えている。

――グラウジーズへの期待を聞かせてほしい。

グラウジーズはもっと成長し、日本のビッククラブになってもらいたい。地元出身で日本代表のホープである馬場雄大選手（富山一高OB）を呼べるぐらいに。

グラウジーズをはじめB1のクラブには観客をワクワクさせる会場の雰囲気とゲーム内容を求めている。富山市総合体育館には今年3月にも、コート中央に天井から吊るす4面大型スクリーンが設置されると聞いている。エンターテイメント性を向上させる大きな効果があり、期待している

祝！　オールスターゲーム富山開催決定

1月14日、Bリーグは、来年1月中旬、富山市総合体育館でのオールスターゲーム開催を発表した。開催地には、富山と大阪が立候補していた。大河チェアマンは、「会場だけではなく、街中いたるところでBリーグオールスターの色に染めてくれることを期待して、富山で開催することを決定した」とコメントした。富山でのアリーナ文化醸成へ起爆剤になりそうだ。

富山グラウジーズ 2・3・4月のホームゲーム

月	日	時	対戦相手	会場
2月	3日	18:05	渋谷	富山市総合
	4日	13:05	渋谷	富山市総合
	10日	18:05	千葉	富山市総合
	11日	13:05	千葉	富山市総合
3月	3日	18:05	名古屋	富山市総合
	4日	13:05	名古屋	富山市総合
	28日	19:05	新潟	富山市総合
	31日	18:05	横浜	富山市総合
4月	1日	13:05	横浜	富山市総合
	7日	18:05	三遠	富山市総合
	8日	13:05	三遠	富山市総合
	28日	18:05	三河	富山市総合
	29日	13:05	三河	富山市総合

（試合時間は変更になることもあります。詳細は富山グラウジーズ公式ウェブサイトで確認ください）

スポーツ伝言板

ここでは、県内の身近なスポーツの話題を紹介していきます！
あわせて皆様からの情報提供もお待ちしておりますので、詳しくは左ページ下記をご覧ください。

オリンピックから学んだもの 栄監督・吉田選手が富山で講演

県生涯スポーツ協議会が主催する指導者研修会（「スポとやま共催、ニッセイテクニカ特別協賛）は2017年11月18日、富山市の富山電気ビルで開かれ、至学館大レスリング部の栄和人監督と、五輪3連覇の吉田沙保里選手が「オリンピックから学んだもの」と題し、師弟コンビでつかんできた栄光の軌跡について語った。

リオ五輪を振り返って吉田選手は「初日に（高岡市出身の登坂絵莉ら）後輩3人が金メダルを獲り、うれしかった。自分の試合では決勝で上がってきた選手が予想と違っていて、相手がすごいと感じた。雰囲気にのまれた。普通、最初の五輪で緊張し、後になるほど慣れるものだが、私は4回目の五輪で『のまれる』という経験を味わった」と心境を語った。また、登坂選手との五輪での思い出について「リオでは二人部屋で、私が帰ると、寝たふりをしていた。翌日の朝、話をしていると涙してしまった。絵莉も泣き出したので、『優勝したんだから、泣かなくていいんだよ』と。後輩に気を使わせてしまった」と率直に話した。

栄監督はリオ五輪について「（吉田を）4連覇させたかった。重圧は半端なものではなかったと思う。登坂の最後の逆転は、すごい。本当にうれしかった」と述べた。続いてこれまでの指導者としての歩みや、男子の指導、東京五輪に向けてどう鍛えていくかなどについて熱く語った。

登坂選手については「相手の心理を読んで戦う選手。自分の弱点を分かり、生活できる。心の強さは、吉田以上。けがしていたところを手術し、来年の世界大会決める予選に出た。ポイントいっぱい取られ、やっと逆転勝ち。全日本の前にまたけがをしてしまった。彼女の気持ち、どんなんだろうと……」と再起を祈る言葉を寄せた。吉田選手も「手術しないで済んだので、それはよかった。貯金はあるから、直すことに専念をしてほしい」と思いやった。

今後の去就が注目される吉田選手は「夢追い人でありたい。何歳でも夢や目標がある。東京五輪までに、結婚出産ができれば……。登坂が『五輪で連覇したら沙保里さんを肩車したい』と言ってくれている。そういうのもいいなあと」と締めくくった。

会場では五輪の金メダルが展示された。講演会後、吉田選手は来場者とじゃんけんし、勝ち残った人3人にサイン色紙が贈り、記念撮影に応じた。

井村コーチの日めくりカレンダー 2名にプレゼント

Tスポとやまは、シンクロナイズドスイミングの日本代表ヘッドコーチである井村雅代さんの日めくりカレンダー『叱咤激励　当たり前』を2名にプレゼントします。

井村さんの言葉には厳しさと選手・競技への愛があります。日めくりカレンダーに書かれているのは「失敗は宝物。自分を変えるチャンス！」「文句を言えるうちはまだ余力がある証拠やろ！」など。2018年は365日、井村さんの言葉を胸に刻み、前進あるのみ！

ご希望の方は、住所、氏名、電話番号、「Truth」に対するご意見・感想を明記の上、メールで応募ください。締め切りは、2018年3月末。応募先は次の通り。個人情報につきましては、商品の発送にのみ使用いたします。発表は現物の発送をもって代えさせて頂きます。

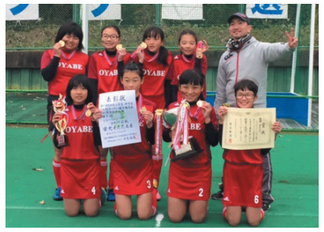
nisennen@tspotoyama.com

西日本小・中 6人制ホッケー 小矢部選抜V2

西日本小学生・中学生6人制ホッケー選手権が、2017年11月に滋賀県立伊吹運動場で開催された。この大会には毎年、小矢部市内のスポーツ少年団の5・6年生のメンバーで結成した選抜チームが、約2か月前から合同練習を繰り返し出場している。

15チームが出場した小学生女子の部では、おやべスポーツクラブ小矢部選抜（写真右）が準決勝で春照（滋賀）と対戦、一進一退の攻防の末、0―0の同点で終了。SO戦となったが、GKの好セーブもあり2―0で制して決勝に進出。決勝では、予選リーグでも対戦し勝利している八川（島根）と再び対戦、序盤から攻守で圧倒し3―0で勝利、予選リーグから計5試合無失点で、見事2連覇を達成した。

同ALL OYABE（同中央）も3位に入賞した。また、24チームが出場した小学生男子の部でも同小矢部選抜（同右）が4位に入賞、ホッケー王国富山をアピールする結果を残した。



記憶に残る陸上・福島の日本一 2017年 富山のスポーツ10大ニュース

2017年も、富山のアスリートは記憶に残る活躍を見せた。「Truth」の読者の皆さんと一緒に、この1年を振り返ってみたい。

秋号の表紙を飾った福島聖（富山商高）の全国高校総体の陸上競技・男子200メートル優勝が印象深い。このほか、全国大会ではボートの栗山咲樹（富山国際大）が全日本選手権のシングルスカルで優勝。バドミントンの園田啓悟・嘉村健士組（トナミ運輸）は全日本総合選手権を制し、嘉村は混合複でも栄冠に輝いた。全国高校総体のカヌー競技・女子K2（500メートル）で、浦田樹里・中田舞絢組（氷橋高）が2連覇。射水市で開催された全国中学ヨット選手権で射北が団体総合優勝し、地元は盛り上がった。

国際大会での活躍は、バドミントンの世界選手権で男子複の園田・嘉村組が3位。ユニバーシアードで、スピードスケート・高橋菜那（ダイチ）バドミントン・西本拳太（トナミ運輸）、スキーノルディック複合・山元豪（早大・現ダイチ）、福居紗希（城西大）、向翔一郎（日大）が入賞した。

このほかの話題としては、リオ五輪の柔道女子72キロ級で金メダルに輝いた田知本遥（ALSOK）が引退。ハンドボールの実業団チーム・アランマーレが県内チームとしては15年ぶりに、日本リーグへ参戦した。地元のプロ球団の話題では、BCリーグの富山サンダーバーズから和田康士朗外野手が育成ドラフト巡目でロッテから指名を受け、ヤクルトで投手として活躍した伊藤智仁氏が監督に就任した。

2017年 富山のスポーツ10大ニュース	
1	全国高校総体の陸上男子200福島V
2	バド世界選手権で園田・嘉村組3位
3	柔道・リオ五輪金の田知本遥が引退
4	朝乃山、県出身者22年ぶり幕内力士
5	ユニバでスケートの高橋4種目入賞
6	全国高校総体カヌー浦田・中田組V2
7	全国中学ヨットで地元射北団体総合V
8	高岡商高、春夏連続で甲子園出場
9	富山サンダーバーズ西地区前期優勝
10	アランマーレが日本ハンドリーグ参戦

県内のスポーツ情報をお待ちしております

『Truth』春号掲載ニュースの締め切りは2018年3月末

原稿・写真（画像）は左記メールアドレスまで、よろしくお願いします。なお、体裁に合せたリライトは編集部でさせていただき、ゲラチェックはありません。

・Tスポとやまメール
nisennen@tspotoyama.com

富山発のスポーツメディア
Truth
Find us on Facebook
Tスポとやま Truth
https://www.facebook.com/tspo.truth
Tスポとやま

Tスポとやま　賛助会員の皆様（2018年1月20日現在）

【法人会員】
小笠原製作所、荒井学園、東亜電工、富山機械工業センター、クラブJoy、山崎機工、富山技販、ユニゾーン、内山精工、日伸精機、津根精機、澤田製作所、岡崎工機、伸栄商会、パレススポーツクラブ、ライブリッジ、高岡スポーツユナイテッド、北陸機材、KANAYA、五省会西能病院、ヤマヒデホーム、JUMP　MARUYAMA、北陸バロン美装、前川歯科クリニック、まちづくりとやま、藤田内科クリニック、ホテルよし原、潤観光開発、常願寺川公園スポーツクラブ、バイエルンスポーツ、ジャストドゥイット、カターレ富山をサポートする会、すき焼はやし、富山ベースボールクラブ、高岡金網、MIYAHARA GYM、千山道場、富山県綜合警備保障、銀盤酒造、タイセイツアーズ、富山信用金庫、けやきひふ科　（順不同）

【個人会員】
尾畑達彦、尾畑美奈、sanwaytoway、新田八朗、鵜殿裕、山形英明、江川正光、塚田三四治、河崎克彦、竹田克史、田村勉、田村恵子、北井誠、松下和磨、西田真、登坂修、野沢紀子、牧内直哉、木内岳夫、髙岡茂樹、大辻保、横嶋好子、小竹秀忠、福井良、成田光雄、中田憲昭、松島公裕、小沼憲子、西野由香、小山孝義、南雲公子、面谷太志、伊東与二、谷崎文保、大家芳夫、大鋸谷孝志、嶋田利隆、松本裕典、笹木忠、若林良、高森勇、田中一郎、清田義之、澤田利浩、東軒一虎、松本壽夫、加藤進也、南部政樹、夏野義一、吉田義夫、河合常晴、Fight絢恵！、沼田秀樹、土肥正秀、末吉正道、北川悠介、幸塚孝行、大谷由里子、黒田明、成瀬昌朗、伊井朋幸、吉野栄樹、鷲田真琴、有澤渉　（敬称略、順不同）

【編集後記】

・アメリカンフットボールの国内最高峰ライスボウルに射水市出身の水野悠司選手が富士通のTEとして出場し、チームの２連覇に貢献した。野球からアメフトに転身し、日本一になったといえば、富山が生んだアメフト界のスーパースター東海辰弥選手（氷見市出身）と同じだ。私が東海選手にあこがれてアメフトを始めたように、水野選手に続く選手が出てくることを期待したい（松井）

・スポーツ庁や各都道府県の教育委員会で部活動のあり方が議論されています。行き過ぎた指導や顧問の長時間勤務が問題になるのは理解できますが、杓子定規に活動日数や時間を制限する方向に進むと弊害も出てくるのではないかと懸念しています。子どもたちがスポーツに出会う機会や、競技に打ち込む選択肢を狭める結果にならないよう、熟慮していただきたいと思います（赤壁）

・落ち込んだ時は、松岡修造さんの動画を見ると頑張ることができる。テニスはほとんどやったことがないけれど……。修造さんありがとう（金森）

・監督、選手も新しい顔ぶれになり、楽しみな富山GRNサンダーバーズ。開幕に向けて、これからハードな時間を過ごす。新たなスタートに私も気持ちを新たにしたいと思った(土田)

・児童数が減少する中、いかにスポーツの魅力を子どもたちに伝えるか。今後の競技人口に直結する大きなテーマです（中沖）

・チアリーディングの取材を通じ、「応援することに情熱を傾けることの真剣さ」について学びました。「Truth」は2018年も富山のスポーツの応援団として、アスリートに関する情報を発信していきます。皆様の健康と活躍をお祈り申し上げます（若林）

NPO法人　Tスポとやま　富山初のスポーツマガジン「Truth」発行・運営

TEL：080-3461-5959　E-mail：nisennen@tspotoyama.com
HP：http://tspotoyama.com/
Facebook：https://www.facebook.com/tspo.truth

顧問：田中一郎
STAFF：赤壁逸朗／金森正晃／久留健太郎／小林永／坂野上満／土田由香里／中沖紘一／永森茂／松井克仁
若林朋子
DESIGN：glic株式会社

Truth 春号は2018年4月下旬発行予定

平昌五輪で舞え！　大江光選手
やり続けることの大切さと「親子」の絆

特別寄稿・泉　敏郎

２０１４年冬季ソチ五輪、スノーボード・ハーフパイプの大江光選手（龍谷富山高出身）は日本代表の切符を手にすることができなかった。４年の歳月を経て、18年２月、韓国で開催される平昌五輪日本代表の切符を手に入れた。この４年間は、大江選手にとって、どれほど長い道のりだったのだろうか？

大江選手が小学生のころ、スノーボードチームの一員だった彼女に、水中トレーニングを指導したことがある。ビート板を使用し、脚力の強化を図るトレーニングだった。決してプールの底に足を着くことなく、泣きながら必死に足を動かし、一心不乱に頑張っていた。「この子は、ほかの選手と違う。強い『根性』『執念』『勝気な精神力』を兼ね備えた選手」と感じた印象が、今も脳裏を離れない。

大江選手の母・幸恵さんは、１９９２年４月、私の前職である富山健康科学専門学校へ入学、水泳指導部に所属し、スイミングインストラクターの道を目指した。

水泳指導部の部長として幸恵さんを指導した私の中での彼女との思い出は、学校の文化祭で披露した「水中エクササイズ」。勝気な精神力、何事にも動じない姿勢で、リーダーとして活躍してくれた。１１００名余りの教え子の中で、特に強く印象に残った学生のひとりだ。

平昌五輪出場が決まり、幸恵さん・光選手親子と久しぶりに再会した。幸恵さんが卒業して22年が経過している。今回、光選手の活躍の裏に、私が学生時代の幸恵さんに伝えた「何事も継続すれば、不可能を可能に変える」という言葉があったという。

光選手は決して運動神経がいいほうではなかったが、母として「やり続けることをこの子の才能にしたい」と思い、厳しく育てたという。成績が出ない時、何度もやめようと思ったそうだが、娘は母に励まされ、母もあきらめない娘の姿に奮い立ったとのこと。苦労の一端を明かしてくれた。それを聞いて、私は目頭が熱くなった。何より、学生時代の姿からは想像もつかない幸恵さんの成長が嬉しかった。この日、大江幸恵さん、光選手を祝福できたこと、自らが手にできなかった「五輪切符」を、教え子の娘が獲得してくれたことが、私にとってはかけがえのない「宝」である。

幸恵さんは、話ってくれた。「平凡な生活、トレーニングではなく、誰も実施できない型破りの徹底した管理、指導を母親として行い、何よりも、誰にも負けない親の愛情の集大成が成し遂げた結果が五輪の切符だった」と。「五輪」というイベントは、トップ・アスリートを目指し、長期間にわたり、目標として戦ってきた「親」と「子」を結びける確固たる「絆」を構築できる素晴らしいものであること、そして「親子」とは、何ものにも代え難いものであることを、私はあらためて大江親子に教えてもらった気持ちだ。平昌五輪での活躍を願って止まない。

がんばれ光選手！

おおえ・ひかる　1995年8月3日生まれ、富山市出身。龍谷富山高卒、ランブジャックスノーボードクラブ所属。小学校1年時からスノーボードを始め、2010年全日本選手権で3位、11年同選手権で優勝、ジュニア世界選手権2位。12年ユースオリンピック優勝。155センチ、50キロ。

いずみ・としろう　熊本県出身、帝京平成大学現代ライフ学部専任講師。富山県競泳国体チーム前監督（２０００年～16年）。52歳。